

先駆的ミドルブラウ作家 イーディス・ネズビットの挑戦

丸 山 協 子

1) はじめに

児童文学作家として名の知られるイーディス・ネズビット (Edith Nesbit, 1858–1924) は、もともとラファエル前派の詩人にあこがれ、自らも詩作で名を残すことを望んでいた。しかし早くに結婚した夫を支えて生活するために多くの小説やエッセイを書かざるを得ず、その中から生まれた児童文学作品が結果的に彼女の名を高めることになった。

この小論では、彼女をミドルブラウ作家のひとりとして位置づけ、彼女の生涯を評伝風に振り返る。特に彼女が夫ヒューバート・ブランドとともに深くかかわったフェビアン協会を中心に、そこで出会った人々や指向、思想を概観する。そののちに、彼女の児童文学作品 *The Railway Children* (1906) (邦訳『鉄道きょうだい』) を再読する。

2) ミドルブラウ作家のひとりとして

ミドルブラウとは、「20 世紀イギリス文化を代表する概念」の一つである。¹ この語は新中流階級 (下層中流) と新メディア文化 (放送) の勃興とともに 1920 年代英国に生まれた。その文化は高級 (ハイブラウ) と低級 (ロウブラウ) の間に立ち、ある時はその両方を批判し、ある時は都合よく双方から吸収統合して、ある限界を有しつつも新しい国民文化を形成した、といわれている (武藤 16)。ミドルブラウ作家の共通点は「適度な娯楽と教養を兼ね備えた軽い読み物を書いたこと、そして一般の人に自身の本が

読まれ、売れることを重要視していたこと」だ(秦 227)。実際、1920年代のミドルブラウの作家たち(たとえばドロシー・セイヤーズやウィニフレッド・ホルトビー、ヴェラ・ブリテンなど)の商業的成功は明らかで、彼女たちはイギリス文化の重要な一翼を担っていた(松本 60)。『ミドルブラウ女性作家の小説』の著者、ニコラ・ハンプルはミドルブラウの女性作家に対して「馴れ合い的で独善的な文学」を書く作家という批判がある一方、彼女たちの文学を「純粹に楽しみのための身体的な喜びと結びついた読書をもたらす、実は繊細で融通の利いた文学」である(Humble 22-24)と述べる。

ネズビットは19世紀末から文筆活動を始めているので、ミドルブラウ女性作家の隆盛よりも少し早い登場と言えるかもしれないが、その資格を十分満たしているように思われる。ハンプルはさらに、ミドルブラウ女性作家の作品には「社会構造やイデオロギーを変えることを交渉したり、読者の新しい階級やジェンダー、アイデンティティを強化したり疑問を呈したりする」力がある、と述べている(255-56)。子どもが主人公であるような、いわゆる児童文学においても、ハンプルの見解は有効といえるのではないだろうか。ネズビットが19世紀末から20世紀半ばにかけて取り組んだ児童文学というジャンルの中でも、ミドルブラウの女性作家たちの挑戦は(その挑戦とは、保守主義と急進主義のバランスを取ろうとしたり、それぞれに揺さぶりをかけようとするものであるが)、少なからず試みられてきた。²

3) イーディス・ネズビットについて——フェビアン協会にかかわるまで

ネズビットは、中産階級出身の農芸化学者であった父と彼の後妻となった母との間の兄弟姉妹の末娘として生まれた。3歳で父を亡くし、1865年から病気のため転地療養しなければならなかった異父姉メアリーののために家族でロンドンを離れ、ブライトンをはじめフランスやドイツの寄宿学校を転々とする生活を送る。のちに『私が子どもだったころ』という回想記

によれば、ブライトンの寄宿学校で入学初日に、持参したままごと道具を同級生に壊されたり、ランカシャーの寄宿学校で髪の毛がもしやもしや、手が汚い、割り算ができない、という理由で教師から罰としてお茶や食事を抜かれるなど過酷な体験をさせられたという。地下の墓所で無理やりミイラを見させられたこともあった。「子どものころ、私は本当に熱心に祈ったものだった。大きくなっても決して子どものころに感じたこと、苦しんだことを忘れないでいられるように」(LAWIY 27)と述べているほどである。また、自分が根無し草 (rootless) であったぶん、自分の描く小説の中の家族にはルーツを与えたい、と思っており、近しく結ばれた家庭の家族 (a closely united family living at home) へのあこがれがあったようだ (LAWIY、ノエル・ストレストフィールドの序 13)。

メアリーが 1817 年の末に亡くなり、ようやくイギリスに戻ると家族は南イングランドのケント州ハルステッドに落ち着く。そこでの生活がのちの『鉄道きょうだい』に多くの材料を提供したといわれるが、長兄アルフレッドが金銭的な問題を起こし一家はその家を引き払うことになる。幼少期からの家族愛への渴望、根無し草的な空虚さを埋めるかのように、彼女は愛情を求めて性急に、労働者階級出身のヒューバート・ブランドと結婚をした。結婚当時すでに 7 か月の身重であったが、結婚後、夫が天然痘で死にかけ、事業共同経営者に資本金を持ち逃げされるという不運に見舞われる。

ネズビットが、大人向けの小説を書き始めたのは、乳飲み子を抱えてとにかく生活していかなければならないという、手っ取り早く収入を得るためであった。子どものころから文章を書くことが好きでドイツの学校にいた 11 歳ころには詩を書いており、15 歳の時には掲載料をもらって雑誌に寄稿するほどの腕前であったという。彼女はほかに、自作の詩を添えたクリスマスカードを作ったり、朗読会で物語の読み聞かせなどもして収入を得た。しかし、熱烈な恋愛結婚をしたはずのブランドは、ネズビットに対して不誠実で、愛人アリス・ホートンとの間に隠し子までもうける始末で

あった。(アリスと夫妻は一つ屋根の下で暮らし、アリスの子でさえもネズビットが育てなければならなかったという。) それでも彼女はブランドと別れようとはせず、それどころか彼の文才を見抜き、進歩的な批評家として活躍できるよう売り込むことまでして彼に尽くした。そのおかげでブランドは、1884年当時、暫定的社会改良運動を進めるグループとして運動を開始したフェビアン協会の初代議長役を務めるまでになった。フェビアン協会とは、次節で詳しく述べるが、社会主義思想を急がずに民主的手段によって着実に前進させようという人々の集まりである。協会内での彼の活躍は続き、1886年には社会主義思想の有名な雑誌 *Today* の編集に携わり、のちに『デイリー・クロニクル』紙やマンチェスターの『サンデー・クロニクル』紙にも健筆をふるうジャーナリストとなった。

ネズビットは夫の考えに共鳴し、フェビアン協会の同志たちと実践活動に入る。家庭生活ではつらい思いをさせられることの多かったネズビットだが、協会での夫婦での積極的な活動を通じ、劇作家のジョージ・バーナード・ショウ、作家の H. G. ウェルズ、経済学者のシドニー・ウェップ夫妻、生理学者のハヴェロック・エリスらと親しく交際することになった。

文芸活動にとどまらず、社会的な活躍にも挑戦するネズビットは、ボヘミアン・タイプの女性であった。髪は断髪でタバコをふかし、強い酒を志向し、わざと流行に逆らうような洋装をし、因習的なヴィクトリア朝の良俗に反抗するような振る舞いをした。とはいえ外に向ける顔は明るく活気に満ちていたという。山登り、水泳、ボート遊び、自転車など戸外の運動を楽しみ、自宅に人を招き、自由で形式にこだわらない雰囲気慕って、多くの若い作家、画家、政治家が出入りした(吉田 9、『イバラの宝冠』58)。彼女の作品は協会周辺に集うさまざまな人々との交流の中から、生み出されたといっていよいだろう。

4) フェビアン協会・ロシア・ボア戦争

ネズビットの実際の作品を検討する前に、彼女を取り巻くフェビアン協

会を中心とした思想を概観しておこう。その際に、キーワードとして「ロシア・クロボトキン・相互扶助」と「ボーア戦争・国家的効率」を挙げておきたい。

1880年急進派の波に乗って政権の座に就いたグラッドストーンの自由党政府も、ヴィクトリア朝の秩序の崩壊、繁栄していたイギリス産業の停滞、経済的難問に効果的な改善策を打ち出せなかった。またダーウィンの進化論によって中産階級の活力源、福音派信仰の土台を揺るがす社会的、精神的緊張は高まっていた(マッケンジー 20)。「いかに生きべきか——啓示宗教がもはや信じられなくなった今、それに代わる生活の核となる知的体系」(同)を求めること、それがフェビアン協会の萌芽であった——マッケンジーはこのように、協会のはじまりの一步を、エドワード・ピースの言葉を引用して述べている。しかし同時に彼は「はじめは、フェビアン協会は大雑把な理想[を語る]のみで具体的な計画はなく、気の合う討論クラブの域を脱していない」(34)とも述べる。実はこの評価は、協会の始めから終わりまで一貫した(それこそが長所でもあり短所でもあった)核心を突いた表現である。社会体制をより良くしたいという理想を掲げながらも、結局は「改良する可能性を示唆した情報を広める」というだけに終わってしまったかにみえるフェビアン協会とはどのような組織であったのだろうか。いったいどのような人々をひきつけ、また引き離していったのだろうか。

マッケンジー夫妻は『フェビアン協会物語』のなかで、フェビアン協会員を「若くて熱心だが労働者の生活を知らず、政治運動の経験もない現実に対して未熟な若者たち」(35)と喝破する。「無政府主義者、土地固有論者、道徳改革者などの考えに耳を傾け、新しい思想に柔軟性を見せていたが、見識にかけていた」(同)と手厳しい。協会の名前はありながらも「既存の組織を利用しながら運動することで現状を改革できと思わせる」ことに長け、それは他人の巢に卵を産みつける政治的カッコーとさえ揶揄される始末であった。しかし、見方を変えれば他人との意見の相違に寛容であり、許容範囲の広いゆるいグループで、居心地よく論じあえる談話クラ

ブの様相を呈していたといえる。バーナード・ショウは「おしとやかで無味無臭」(83)と協会を評したというが、初期のフェビアン協会は「協会としての主張を持たないこと」こそが主張であり、その寛容さが新しい発想や分野を切り開く余地を残していた(84)。

過激派とは異なり、「怒っても革命を望んでいるのではない」(92)という彼らの姿に、ロシアから亡命してきたアナーキズムの指導者たるクロボトキンもステプニャクも拍子抜けしたようだ。「1840年代のイギリスはヨーロッパにおける社会主義運動のほとんど先頭を切っていた。ところがそれに続く反動時代に、労働者階級にあんなにも深刻な影響を与えたあの大運動が——今日科学的社会主義とかアナーキズムとか言って推し進められているものはあの時とくに[あったのに]——突然停滞してしまった」(クロボトキン下巻252-53)。1886年秋から冬にかけてイギリスで講演を依頼されたクロボトキンは「労働者の狭い部屋でも、ブルジョワ階級の応接間であろうとも、社会主義とアナーキズムについて実に活発な議論が夜遅くまで続いた。[中略]どこへ行っても『革命』は不可能で[誰しもが]妥協で生きている。2つの階級は対立していない、『慈善』という観念から抜けきったものでもない」(314)と述べている。³ スラム街を訪れ、公民館やトインビーホールで働き、労働者と生活を共にしても、熱狂はするが「骨の折れる準備が必要と分かってみると、大半は積極的な活動からは身を引き、同情的な傍観者になっている」(316-17)。これが、「当時イギリスの言論界では公認された存在であった」(富山166)クロボトキンの見たイギリスの現状であった。

とはいうものの、クロボトキンが振り返っているように、イギリスでニヒリストやアナーキストが形だけで実行力がなかったわけではなさそうだと(富山157)。クロボトキンによる社会進化についての講演会では「テーマが〈実演付きのアナキー〉ではない」ことを説明できるように広告に出すことが語られているほか、1880年代には時限式の爆弾も精度を増して、国内でも爆破事件が相次いだ、という(同159)。⁴ 爆発物法(1875年制定)は

1883年になってようやくダイナマイトなどを犯罪に使用するのを禁じるように改正された。それでも、鉄道の駅や橋が、メディアや役所の建物が狙われ、爆破される事件が続く——そして各種の新聞の紙面には爆破事件やニヒリスト、アナーキストに関する情報があふれている中で何人かの作家がそれを作品の中に取り込んでいった(160)。すでに指摘されているように、「いずれにしても[中略]ダイナマイト爆弾の事件史のまわりにニヒリズム、アナーキズム、社会主義などの表象のほか、恐怖や空想やユーモアが種々雑多に吸い寄せられていったことはまちがいない」(富山 164-65)とするならば、児童文学作品にもその痕跡が残されている可能性を検討することはあながち見当違いではなさそうだ。

クロボトキンのもう一つの重要な思想、相互扶助論についてもふれておきたい。『19世紀』誌に連載された論文で彼は、ダーウィンの「生存競争」の継承者たち(特にT. H. ハックスレーの「生存のための競争——ひとつの綱領」(1888))がその公式を引き延ばしてどんな[極端な]結論までもっていったか、だれでもよく知っている」と書く(クロボトキン下巻 319)。「イギリス的には『生存競争』は弱きものは禍なるかな、のスローガンの意味に解釈され、ほとんど一種の宗教のようだ」という危機感から書かれたものだ。そしてクロボトキンはハックスレーにこう応答するのだ、「相互扶助は相互競争と同じ程度に自然の法則である、しかし種の進歩的な進化のためには前者のほうが後者よりもはるかに重要である」(同)と。

フェビアン協会に話を戻す。1887年血の日曜日事件の教訓で、暴動や粗暴な扇動ではなく、ストライキやデモ、宣伝活動を通して無欠状態で社会改革を目指しながらついに1889年に28のパンフレットをまとめた『フェビアン論集』が出版された(128)。この論集の特色は、イデオロギーばかりでなく現実に基づいた改革を訴え、執筆者たちの個を重んじ全体としての理論の一貫性は求めなかったことだ。ネズビットの夫、ブランドは(新しい社会秩序へ移行するのはどんな政体からか)政党に束縛されない社会主義政策家たちの代弁者であると自負し、生存競争の激化は労働者に同盟

と団結を強いていることを批判した。この主張はクロボトキンの「相互扶助論」と親和性があるといってよいだろう。とはいえやはり精神論先行、机上の空論ばかりは変わらなかったため、対立や闘争することを避け、政治運動の実践のない状態に業を煮やした一部の会員（たとえばアニー・ベザント）は結局協会から脱会していった。

ビアトリスとシドニー・ウェップ夫妻を迎えても相変わらず協会の指導者たちは政治運動を推進する責任を負おうとしない逃げ腰のまま 19 世紀末を迎えようとしていたが、外交政策に立ち向かわなければならない事態が発生する。それがボーア戦争であった。海外での帝国主義と国内での社会改革とはどんな関係があるのか、植民地政策に対するフェビアン協会の取るべき立場とはどんなもののなのか——この関連性が初めて認識されたのである。ブランドも「この機会を利用しないで政治活動から逃げ続けるならば他の国々からはじき出されてしまう」と考え「イングランドこそが文明の恩恵を真っ先に受けるにふさわしい唯一の国である」と述べている (316)。マッケンジーはフェビアン協会の『『国家的効率』という“運動”』（伊藤 60）についてあまり詳細な説明をしておらず、シドニー・ウェップが「良き国民を量産し、教育するという国家的能率の名において社会改革はイギリスの帝国主知の運命と対を成すという理念に専心[しようとした]」（326）と解説するととどめる。さらにショウが「能率的なエリート階級によってイギリスが管理されることが望ましい」（342）と語り、「イギリスは国際文明の代表者であり、その使命は世界を『普遍的文明のために』確実に統治すること」というパンフレットを刊行した、と淡白に紹介する。しかしながら、結局フェビアン協会の政治への身の乗り出し方は中途半端であった。1906 年、H. G. ウェルズは「協会の欠陥」という弾劾演説を行う。彼の批判はショウの反撃により敗北を喫するが、それでも協会が「常に牧師、医師、社会事業家、役人、教師、作家、ジャーナリスト、俳優、画家など知的職業の周辺にいる人を強化したが、政治の素人に訴えかけてきた」だけだったということもまた露わになった。20 世紀にはいってもフェビア

ン協会はまだヴィクトリア朝人的な「慈善は貧困を軽減するだけでなく中産階級の道德心を高める役を果たす」という確信を引きずっていた。1914年ブランドは死の直前、「フェビアン協会が規約に書かれた社会主義から脱線し」(443)、「本当の使命を果たせなかった」と言ったという。しかしマッケンジーも言葉を変えながら繰り返し述べているように、フェビアン協会が中途半端に終わったのは、「[協会が、]教義(を重んじる)」というより気分(の集団)であったこと」であろう。新しい道德律に基づいた社会を再建し続けようと模索したかもしれないが、「所詮、イギリスブルジョワの道德と安逸、ブルジョワの啓蒙運動の域を脱しえなかったのだ」(マッケンジー 484、1935年7月16日付のビアトリス・ウェップの日記)が協会の性質を端的に表しているといえるだろう。

5) 『鉄道きょうだい』におけるネズビットの挑戦——フェビアン協会の言説を脱構築？

ネズビットの伝記的事実とともに彼女の置かれた環境、周辺の言説や協会の言説を概観してきた。それでは、彼女の描く児童文学作品にそれらの言説はどのような形で息づいているのだろうか、痕跡は残っているのだろうか。

この節では『鉄道きょうだい』の中のいくつかのエピソードを検討し、再読していきたい。ハンフリー・カーペンターは、その論集『秘密の花園』のなかで、ネズビットを「見せかけのヴィクトリア朝人」と評し、この作品を「メロドラマ的な山場の連続を中心に構築された」センチメンタルな出来である、とかなり厳しく批評している(272)。「子どもたちは甘やかされて、本当のつらさを味わうことが無いように」(同)してもらっており、20世紀の作品でありながら「1870年から80年代にかけて流布した[説教じみた、道德臭の強い]風潮を受け入れた後期ヴィクトリア朝作家のようだ」(270)と批判するのである。また、「彼女は単にフェビアン協会の社会主義者たちが醸し出す雰囲気のにまれていたにすぎず、彼らが唱える主義

主張を知的に把握していたわけではなかった」(256)とさえ言う。しかし一方フォスターとシモンズのように、この作品をジェンダー論から読み直し擁護する声もある。彼女らは「子どもたちの読み物に昔からあった性役割モデルを利用しつつ同時に転覆させている」(250)と述べ、姉ロバートの鉄道機関士願望や、姉妹たちの意識や理解のレベルが常に男きょうだいを上回り(259)、男性優位性を風刺していることを指摘している。

『鉄道きょうだい』は父親が政治的理由——ロシアに情報を漏洩したというスパイ容疑で逮捕されたためロンドンからある田舎の村に母親と移住することになった3人の子どもの物語である。母親は生計を立てるために作家活動に専念し、3人の子どもたち——12歳の姉ロバート(通称ロビー)を筆頭に弟のピーター、末娘のフィリス(通称フィル)は鉄道の沿線で毎日を通ぐす。子どもたちの無邪気な行動はときに村人たちの誤解を生むこともあるが、善意の人々に囲まれた子どもたちの日常の冒険談が淡々とつづられる。最後には無実が証明された父親が帰還し、一家は再びそろって幸せな家庭生活に戻るであろうことが予感され、大団円を迎える。

一家の物語にとって父親の不在は母親を職業婦人へと目覚めさせ、子どもたちは産業革命のシンボルと言える鉄道という近代的なモータリゼーションと出会うきっかけにもなり、その後の物語の展開に大いにかかわっている。また、スパイ容疑という政治的犯罪に巻き込まれての父の不在は、子ども向けの物語でありながら暗く深刻な影を落としているように思われる。ネズビットの伝記を書いたブリッグスは「機密がドイツに売られたという違いはあるが」この設定を1894年に起きたドレフェス事件になぞらえる(242)。フランス陸軍情報部はパリのドイツ駐在部官邸からフランス軍関係者内に対独通牒者がいることを示すメモを入手したことから、その犯人を砲兵大尉ドレフェスであると嫌疑をかける。彼にはそのまま終身禁固刑が下されるが、状況証拠すら欠く、冤罪に対し彼の無実を信ずるエミール・ゾラなどの文化人が人権擁護の旗印のもとに抗議活動を展開、1906年ついに大尉の無罪が確定する。こうした売国事件と似たような深刻な冤罪

事件は「ロシアでも起こっており、権利の侵害や迫害による亡命がなければクロボトキンやステプニャクといったロシア人たちとネズビットが友人になることはなかった」(Briggs 242-43)とも指摘している。

『鉄道きょうだい』には確かにさまざまな登場人物のモデルとおぼしき実在の人物が存在する。父親の誤認逮捕からはドレフェス事件を想起したように、母親はネズビット自身を、子どもたちはネズビット自身の子もたち、ロシアからの亡命者シュチェパンスキー氏はクロボトキンとステプニャク、「9時15分」の列車から子どもたちに手を振ってくれる鉄道会社の重役はグレート・ウェスタン・レールウェイの社長であったベアトリス・ウェップの父というように。しかし断っておきたいのであるが、この節で問題にしたいのはネズビットが実在の人物や事件をモデルにして児童文学作品を書いたのかどうかという因果関係ではない。たとえば問題の事件はどのような社会的言説の磁場にあったのか、ということである。ネズビットが夫とともにかかわっていたフェビアン協会や、その場に集っていた仲間たち、それを介して知り合った文芸仲間たちとの‘せめぎあいの痕跡’を検討したいのである。

ひとつの試みとして、父親のスパイ冤罪事件とピーターの炭鉱泥棒のエピソードが呼応していると読むのはどうであろう。ピーターはある日、ロンドンからいわば「都落ち」してきた田舎ですっかり貧しい暮らしを強いられている自分たち家族の力になりたい、と考える。自分の発見した「炭鉱」から石炭を掘ってくる仕事(実はそれは駅の所有する石炭山で、こっそりと駅の山側からではなく内側から掘り出して取ってくる、という泥棒行為)をしているところを、駅長に見つかって姉妹たちの前で捕らえられてしまう。ピーターは盗みではなく労働のつもりだった、と言い訳をする。さらにピーターは彼のしていることを心配して後をつけてきた姉妹たちに向かって「[のぞき見の] 言い訳なんて聞きたくないね、君たちは[隠れてのぞき見する] 卑怯なスパイの裏切り者だ」(56)とさえる。実はこの時には子どもたちは父親がスパイの濡れ衣を着せられ投獄されていることは

知らない。しかし読者である私たちはここで「スパイを疑われている父親」の「子どもたち」もまた、泥棒にまちがわれたり、きょうだいの中で「スパイ」と糾弾して傷つけあいそうになるエピソードとして読むことになる。ボビーとフィルは次のようにとりなす。

「あたしたち [は]、あなただけが悪いわけじゃないって言いたかったのよ [中略] もしも裁判になったら [スパイしていた] あたし達だってあなたと同じくらい悪いわけよ」(57)

[するとピーターは]「とにかく今のところ、うちの穴倉には石炭がすごくたくさんあるよね」とつぶやきました。「だめよ！」ボビーがさえぎりました。「そんなこと、うれしそうに言っちゃあ」「どうかなあ」ピーターは少し元気づいて、結論のように言ったのです。「石炭ほりはやっぱり犯罪とは言えないんじゃない...」でもボビーとフィリスははっきりと犯罪だと思っていました。ピーターも口ではそうであっても [中略] 盗みは盗みとはっきり認めていたのです。(下線筆者 58)

「悪いことをするとやがては父親と同じところに行くことになる」とメイドに言われていたピーターの「盗み」のエピソードは、父親の冤罪事件のパロディとも読めるのではないだろうか。子どもたちは父親が良からぬことに巻き込まれたことを示唆されていながらも「炭鉱泥棒」というやんちゃなエピソードを通じて、下線部に見られるように、明るさを失わない。大人である駅長の許しを得て、子どもたちは反省をしても茶目っ気たっぷりに前を向く——ネズビットは子どもたちのたくましさを描くのである。

このようにネズビットがフェビアン協会の活動や仲間たち、夫ブランドとの生活の中で当然知っていたと思われる事件や出来事のひとつひとつの影響やモデルを同定することよりも、そのような事件の周りに恐怖や、空想、ユーモアや笑いが集まってきて事件そのものがパロディ化され、ひねりが加えられていることに目を向けることのほうがより興味深い。パロディや脱構築のかたちを取って作品を書くことで、ネズビットがフェビアン協

会周辺の社会的言説の形成に自らも関与していた、ことが明らかになるのではないだろうか。

次に、あるロシア人との出会いが一家の日常に変化をもたらすエピソードを取り上げる。ある日外出した母親を迎えに駅に着いた子どもたちは汚れた身なりの外国人旅行者が駅員をはじめ村の大人たちに囲まれているところに出くわす。「別に悪いことをしたわけではないよう」(119)だが、「どうしたらいいのか、途方にくれているらしい」(同)というその旅行者は実はロシアの有名な作家だった。しかし「まだ皇帝のいる時代」⁵に当局に目を付けられて投獄され、移送先のシベリアの鉱山から戦場に移る際、逃亡したという人物であったのだ。当初彼の話す言葉が全く理解できない(彼は英語を話せない)ために、周囲には「つぶやくようなよわよわしい声が外国語で何かうったえているよう」(119-20)ということしか伝わらない。帰りに着いた母親が彼と会話をした結果、彼の身元は、母親自らもその作品を愛読していたという“ロシアの有名な作家、シュチェパンスキー氏”であり、ロンドンにいるはずの妻子に会いに行く途中で乗り換え先のこの駅で切符をなくして困っていることが明かされる。ネズビットの作品では子どもたちにとって近い大人以外には固有の名前を与えられないことが普通であるのだが⁶、具体的な名前が与えられていることも目を引く。

再びブリッグスの伝記(75)とフェビアン協会を巡る当時の言説空間とを参照するならば、このロシア人作家“シュチェパンスキー氏”は、実在したニヒリスト、ステプニャク・クラフチンスキーという社会革命党、闘争同盟の一員がモデルで、クロボトキンとも友人関係にある人物と言われている。⁷ アナーキスト革命運動がらみで、ロシア皇帝の秘密警察長官を暗殺して世間を騒がせたというステプニャクは1872-74年の間にクロボトキンと知り合い、イギリスに亡命後1893年ころにはロシア語翻訳を勧めたコンスタンス・ガーネットと愛人関係になったこともある(クロボトキン下巻115-126)。⁸ しかし、またしてもここで問題にしたいのはモデルが誰であろうと、明らかにロシアの革命家たるアナーキスト、ニヒリストがこの

児童文学作品の中でこんなにも弱く描かれてしまっているということだ。「体がめちゃくちゃ弱っているようだ」(119)とか、「まるでわなにかかったキツネのような目をしている」(123)など「よわよわしい」「ひどくおびえている」(同)「落ち着きがない」(同)と形容されるロシア人は前節でみたような、ダイナマイトを投げる戦うアナーキストの像と全く結びつかない。ここでもネズビットは身の回りの言説空間に当然あったイメージを突き崩すような、実際とは正反対の「弱い」アナーキスト像をあえて登場させ、パロディ化した形で読者に提示しているようだ。もちろんその後“シュチェパンスキー氏”は手厚く介護ともてなしを受け、子どもたちとも仲良くなり、鉄道会社の重役の尽力でロンドンの妻子の居場所も判明する。「驚いたなあ、この人が君たちの家にいるというのかね？ 私はこの人の作品を読んで、とても感動したんだよ。シュチェパンスキー氏の作品はヨーロッパのほとんどすべての国語に翻訳されているんじゃないだろうか。心を打つ実に気高い作品だ」(174)。「君たちがこの問題に関して、私の意見を求めたのはまさに正解だった[中略]私にはロンドン在住のロシア人にかなり知り合いがいるし、シュチェパンスキー氏の名前はロシア人なら誰だって知っているだろうからね」(同)。子どもたちの母親、鉄道会社の重役、そしてロシア人作家「シュチェパンスキー氏」の3人でお茶を飲む場面に注目しよう。

「いい知らせを持ってきたんだよ。シュチェパンスキー氏の奥さんと子どもが見つかったんだ。じかに伝えて喜ぶ顔が見たくてね。」庭に座っていたシュチェパンスキー氏は[その話を聞くと]一声叫んで飛び上がり、お母さんの手にうやうやしくそっとキスをしました。それから椅子に腰を落として両手で顔を覆って泣き出したのです。[中略]お母さんとシュチェパンスキーさんのフランス語のやり取りがようやく終わり[みんなが陽気にはしゃぎだすと]“9時15分のおじいさん”も冗談を飛ばしたり笑ったりしてとても楽しそうで、お母さんもおじいさんと同じくらい流ちょうにフランス語を話したので、そのお茶のひとつきは大いに盛り上がりました。(下線筆者 179-180)

この場面は、一見すると子どもたちが機転を利かしてロシアから亡命してきた著名な作家を助ける、という善き行いの達成を寿いでいるかにみえる。しかし一方で、反社会的な人物が結果的に幸福な顛末を用意されることで物語の中にまるく収められ、シュチェパンスキー氏が体制に組み込まれてしまったことを意味していると読めないだろうか。彼の反体制的なアナキズムが薄められ、弱められてしまったといえるだろう。イギリスに亡命したクロボトキンに「革命家の少なさにあきれた」と揶揄されフェビアン協会の友好主義、優柔不断さ、ぬるま湯的な体質を笑われていた(クロボトキン下巻 252) というネズビットが、皮肉にも児童文学の中で実はひそかに「弱い革命家」を描くことで反撃した、と解釈できる箇所かもしれない。

3人が引っ越してきたばかりの時「運河で通りかかった船に乗った少年にいきなり石炭を投げられた」(92、187-88)というエピソードもよく読むと興味深い。中産階級の教育のある常識的な子どもたちである3人は石炭を投げられても仕返しせず、「鉄道に関係している人はみな親切」であるのに一方、「運河に関係している人たちはとても感じが悪かった」(91-92)と語るにとどまる。当時鉄道の駅で爆破事件が頻発していたことは前節で引用したとおりだが、ここでもネズビットは児童文学作品において「鉄道」を「運河」に、「ダイナマイト」を「石炭のかたまり」にずらして描くことで、爆破事件そのものも子どもたちの内紛の中にパロディ化して表現したといえるかもしれない。

最後に、子どもたちが仲良しの駅員パークスの誕生日を祝うエピソードを検討したい。カーペンターは『『鉄道きょうだい』は巧みに構成され楽しい読み物に仕立て上げられてはいるが、物語そのものの論点であるはずのもの——大人社会に潜んでいるかなりの不正や不公平(父親が投獄されたのは思い違いからである)を子どもたちが避けてとおっている」(271-72)と述べている。確かに、子どもたちは何か困った問題が起きるとすぐになんでも「9時15分のおじいさん」である鉄道会社の重役に相談してばかり

いるかもしれないが、だからといって子どもたちが大人に守られすぎなのではないか、という批判は当たっているであろうか。

子どもたちは普段から世話になっている駅員パークスの誕生日を知ってプレゼントを贈ることを思いつく。自分たちばかりでなく、村人たちからの協力も得ようと、一戸ずつ扉をたたくがなかなか思い通りに集めることができない。「ある村人は喜んで協力してくれましたが、ひどく不愛想な返事が返ってくることもありました。[中略] 広く寄付を募るというのはなかなかの大仕事なのです」(210)。しかし、3人はあるひとりの婦人から次のような申し出を受ける。

うちのたきぎ小屋の中に乳母車が一台あるんだけど。娘のエミーの子どものために買ったものの。あいにく生まれてたった半年で亡くなってね、エミーはそれっきり子宝に恵まれなかったのよ。ミセス・パークスにしても乳母車があればあの發育のとびきり良い重たそうな赤ちゃんを載せられるし、買い物だってよっぽど楽になるんじゃないかしら。あなたたちパークスの家に乳母車を届けてくれる？

(下線筆者 216)

ここでプレゼント候補として挙げられている“乳母車”とは、話者ミセス・ランサムが孫のために買ったものだった。彼女は当初、パークスの誕生日祝いなどに無関係の自分を巻き込まないでほしい、と非協力的な態度を示していた。しかし、子どもたちの熱心さにほだされ彼女は翻意する。この箇所、中産階級ばかりでなく労働者階級の家庭での出産の奨励が読み取れる。そして残念ながら子どもが亡くなるという現実も、“取り残された乳母車”という皮肉によって強調される。

政策らしい政策を持たないことをよすがとしていたフェビアン協会において、唯一の政策とも呼びうる「国家的効率」の政策、スローガンを思い起こしておきたい。それは、ボーア戦争によって露呈した政治や行政の非効率を糾弾し、アマチュア支配からエキスパート支配への転換を求める世

論の要請にこたえるものだった。また、フェビアン協会の人口のアンバランス是正策とは中流階級を中心とした「洗練された女性たち」に国家による支援を与えることによって出産に伴う経済的な負担を軽減する一方、道徳的な行為と称賛することによって出産を奨励するというものである。それは個人よりも国家や社会の優越を唱えて「国家の子どもたち」という発想をとる（伊藤 75）。したがって、進化の方向性についての正確な認識に基づいた「人間による選択」によって効率よく社会をコントロールしようという欲望を抱くフェビアン協会は、実は優生学と極めて高い親和性を持っていたともいえるのだ。物語の舞台である小さな村を「国家」に置き換えるならば、その中でかわいがられ「現実世界から守られている」（カーペンター 272）のは中産階級の3人の子どもたちだけではない。労働者階級のパークス家の子どもたちもまたわざわざ、「どの子どもも光り輝くような清潔な顔でした」（218）とカッコつきで強調され、階級を乗り越えて「村（国家）の子どもたち」として包摂されている。子どもたちは「守られすぎている」のではなく、あえて「守られるべき存在」として描かれているのである。多産の奨励（貧乏人の子だくさんとして設定されていてもよいはずのパークス家の子どもたちも、ポビーたち鉄道きょうだい3人と同数であるが）と、子どもが亡くなって育たなかったために余ってしまった“乳母車”を、アイロニカルに対比させて描くネズビットのひねりを、単なる村人の美談として読み過ごすことはできないだろう。ネズビットはパークスの誕生日のエピソードを描くとき、またしても当時の社会的言説を脱構築し、フェビアン協会の政策をうまくパロディ化して作品に組み入れていると読むことができるのではないだろうか。

6) おわりに

19世紀末から20世紀にかけて児童文学で名を成したイーディス・ネズビットについて彼女の生きた言説空間であるフェビアン協会とともに、いくつかのキーワードを中心に概観し、その代表作と呼べる『鉄道きょうだ

い』を読んできた。

この作品は批判されることも多かったが、今回検討したように、モデルとした実在の人物を思い起こさせるような人物造型が見られたとしても、問題はそこにあるのではない。むしろ彼女は自分の置かれた言説空間を客観的にとらえ脱構築することで、彼女もまた自分の属していた言説空間に批判を加えることを忘れなかったようだ。批判的なまなざしをもって自らの属する一派を眺めることが出来ずに、どうして現実をパロディ化したエピソードを物語に組み込めるであろうか。

彼女は 1920 年代に主として活躍するミドルブラウ女性作家の先駆けとして、多作でありながらも「純粹に楽しみのための身体的な喜びと結びついた読書をもたらししてくれるような」文学を書いた。大人のための文学の書ける作家になることや詩人への強い憧憬を持ちながらも、書きたいことを書く喜びに目覚めることのできた幸せな作家といえるだろう。

注

1 ミドルブラウとは 1920 年代に登場した文学様式ではなく文学の展開の結果登場した批評用語である (Brown and Grover 8) とする記述もある。

2 筆者は児童文学作家として有名なルーマー・ゴッデンを、同じくミドルブラウ作家という位置づけから取り上げ、いくつかの作品の再読を行った (2018)。

3 アナーキズムについて、クロボトキンは 1910 年ブリタニカ百科事典のために、次のように定義した。「生活行動上の原則又は理論に与えられた名称で [中略] 社会は政府を持たずに構想される。そうした社会における調和は法律への従属や権威への服従ではなく、様々なグループ間で結ばれる自由な契約によって得られる」 (<http://jp.rbth.com/history/81245-roshia-no-anakisto> より)。

4 オスカー・ワイルドは初期の戯曲『ヴェラ、あるいはニヒリスト』(1882) でロシア皇帝を暗殺しようとするロシアのテロリストたちを描いた。アナーキストやニヒリストが暗躍し、19 世紀末に社会問題となるテロはその後、R. L. スティヴンソン夫妻の『ダイナマイター』(1885)、ワイルドの『アーサー・サヴィル卿の犯罪』(1891)、コンラッドの『密偵』(1907)、『西欧の眼の下に』(1911) などの作品の中で描かれ続ける。

5 拙論 (2017) の注で 1887 年の血の日曜日事件を 1905 年の事件と誤って記載してしまった。本稿でお詫びして訂正させていただきたい。

6 たとえば、子どもたちの姓も不明であり、鉄道会社の重役もまた“9 時 15 分のおじいさん”という通称が与えられているのみである。のちに言及する駅員のパー

クスとこのロシア人は特別な存在と言ってよいだろう。

7 ニヒリスト、アナーキストという呼称は厳密に使われるべきだが、本稿ではニヒリストは「政治的ニヒリズム」、自由を束縛するあらゆる権力に暴力で反抗し、爆弾テロを起こすようなニヒリズムを目指す人、という解釈で使う。ステブニャクは実力行使をしている点からも、「政治的ニヒリスト」と呼べるであろう。この定義は田尻芳樹氏が引用されている(386)、ドナルド・A・クロズビーによるニヒリズムの5種類の定義を参照させていただいた。

8 コンスタンスは、6歳年下のエドワードとの間に、ブルームズベリー・グループに属することになるデイヴィッド・ガーネットをもうけた。また、彼女の妹はフェビアン協会の会員であった。

引用文献

- Briggs, Julia. *A Woman of Passion*. London: Penguin Books, 1989.
- Brown, Erica and Mary Grover eds. *Middlebrow Literary Cultures: The Battle of Brows, 1920–1960*. New York: Palgrave Macmillan, 2012.
- Carpenter, Humphry. *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1985. 『秘密の花園——英米児童文学の黄金時代——』定松正訳、こびあん書房、1988年。
- Forster, Shirley and Judy Simons. *What Katy Read: Feminist Re-readings of 'Classic' Stories for Girls*. London and New York: Palgrave Publishers LTD., 1995. 『本を読む少女たち』川端有子訳、柏書房、2002年、155–170頁。
- Humble, Nicola. *The feminine Middlebrow Novel, 1920s to 1950s: Class, Domesticity, and Bohemianism*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- MacKenzie, Norman and Jeanne. *The First Fabians*. London: Quartet Books Limited, 1979. 『フェビアン協会物語』土屋、太田、佐川訳、ありえず書房、1984年。
- Nesbit, Edith. *Long Ago When I was Young*. Illustrated by Edward Ardizzone and George Buchanan. 1966. London: Beehive Books, 1987.
- . *The Railway Children*. 1906. London: Puffin Classics, 1994. 『鉄道きょうだい』中村妙子訳、教文館、2012年 第2版。
- ニューファンタジーの会(中野節子、水井雅子、吉井紀子)『イバラの宝冠——イギリス女流児童文学作家の系譜 第5巻』透土社、1996年。
- 伊藤 茂「世紀転換期における『退化』と『効率』——フェビアン協会の国家的効率政策への道筋——」『東京外語大学 言語・地域文化研究』第5巻、1999年、57–80頁。
- クロボトキン、ピョートル『ある革命家の思い出』上下巻 高杉一郎訳、平凡社、2011年。
- 秦 邦生『『軽い読み物』とミドルブラウ読者たち』石塚久郎他編『イギリス文学入門』三修社、2014年、227頁。
- 田尻芳樹『『ドリアン・グレイの画像』におけるニヒリズム』『19世紀「英国」小説

の展開』松柏社、2014年、385–406頁。

富山太佳夫「ダイナマイトを投げろ」『ダーウィンの世紀末』青土社、1995年、155–170頁。

前(丸山)協子「あるミドルブラウ作家の挑戦——新たな秘密の花園を求めて」『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』中央大学人文研究所研究叢書、中央大学人文研究所、2018年、293–325頁。

——「“言葉”を使いこなすヒロインたち——児童文学に見る“コミュニケーション能力”とは?——」中央大学人文研究所『人文研紀要』第90号、2018年、171–195頁。

松本 朗「第3章 ミドルブラウ文化と女性知識人——『グッドハウスキーピング』、ウルフ、ホウルトビー」『終わらないフェミニズム——「働く」女たちの言葉と欲望』日本ヴァージニアウルフ協会 河野、麻生、秦、松永編、研究社、2016年、59–84頁。

武藤浩史『ビートルズは音楽を超える』平凡社、2013年。

吉田新一「訳者あとがき」イーディス・ネズビット『宝さがしの子どもたち』吉田新一訳、福音館書店、1974年、2007年 第23版。